



新増  
女諸禮儀錦

五

器目録

女法衣の圖	女子の河をうつり
女子の生れ形	二位七世の辨
風儀を承る事	も智れ教の辨
糸竹の道の辨	文書はとももり
衣箱の心傳	衣箱の心傳
地手の家儀の辨	衣箱の心傳
髪結の辨	衣箱の心傳
眉の辨	衣箱の心傳
人持の心傳	衣箱の心傳
持身の辨	衣箱の心傳
肴の辨	衣箱の心傳
茶の辨	衣箱の心傳
酒の辨	衣箱の心傳
餅の辨	衣箱の心傳
菓子	衣箱の心傳
湯	衣箱の心傳
火	衣箱の心傳
扇	衣箱の心傳
履	衣箱の心傳
袴	衣箱の心傳
襦袢	衣箱の心傳
帯	衣箱の心傳
小袖	衣箱の心傳
着物	衣箱の心傳
髪	衣箱の心傳
顔	衣箱の心傳
手	衣箱の心傳
足	衣箱の心傳
心	衣箱の心傳
身	衣箱の心傳
徳	衣箱の心傳
義	衣箱の心傳
禮	衣箱の心傳
儀	衣箱の心傳
錦	衣箱の心傳

仁口  
1035  
/





序

夫禮は孝也... 人々之の行... 孝の道... 男女の別... 進退飲食... 婦人の儀... 諸侯の禮... 孝の道... 男女の別... 進退飲食... 婦人の儀... 諸侯の禮...

孝道



孝の道... 男女の別... 進退飲食... 婦人の儀... 諸侯の禮... 孝の道... 男女の別... 進退飲食... 婦人の儀... 諸侯の禮...

後王國主人誌





# 上之巻目録

女子教訓の事	一丁	女の道と守の事	一丁
平生奉勅の事	二丁	女子二從の事	三丁
貞女と才の事	二丁	婦人七志の事	三丁
洞南の妻の事	七丁	平生心願の事	六丁
美人の相対の事	八丁	知より仕附の事	十八丁
歩行風の事	九丁	女子つゝあはれの事	二十丁
立居の事	十丁	書名の事	廿二丁
女使と書名の事	十八丁	和歌の事	廿二丁

女使上ロ三

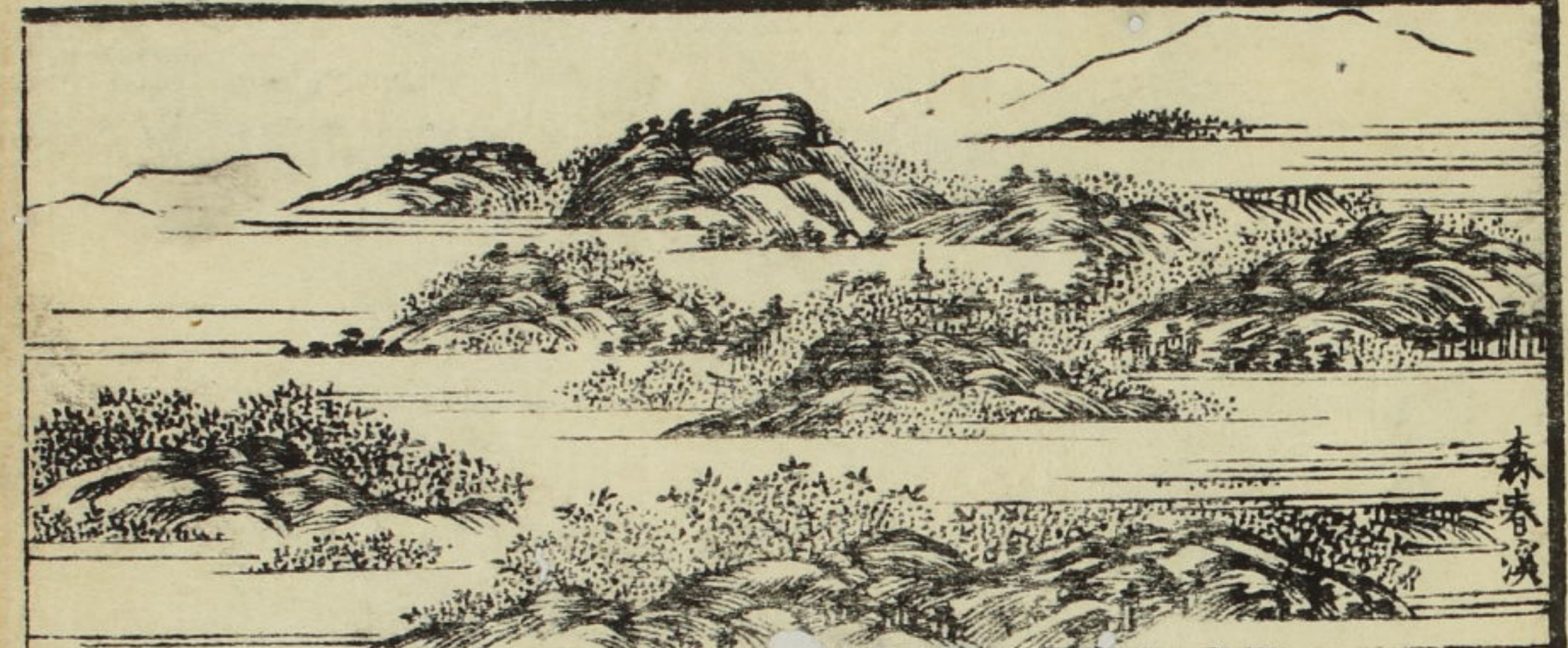
女使の事	十八丁	糸布の道	廿三丁
文字の事	十九丁	徳物	廿三丁
和歌の事	十九丁	女心	廿四丁
色紙の事	二十丁	四季衣後の事	廿五丁
衣服の事	廿二丁	化粧仕度	三十丁
琴の事	廿二丁	人小指	廿二丁
尚書	廿二丁	家内の人	廿二丁
三行の事	廿三丁	香の事	廿三丁
髪の手紙	廿四丁	骨の事	廿四丁
眉の手紙	廿二丁	吸物	廿五丁
歯の手紙	廿二丁	飲茶	廿五丁
化粧の手紙	廿二丁	浴衣	廿七丁

門 仁  
辨 1035  
卷 1-2

おろろの始りの事	世三	葉子と出とる	世七
紅粉始りの事	世三	糍と煮る事	世七
摺并の事	世三	口くひ指の事	世六
船子湯煖湯取付指	世四	腰取煮る事	世六
青虫のりり喰る事	世六	門くひやう指事	世六
昆布とまわらう事	世七	麵敷くひ指の中	世四
仇成事とらふ門角	世七	そうに喰取乃事	世四
梨子柿の皮とり指	世九	五節句はる門傍式	世四
降乃くひ指の事	世十	響夜のおむ湯の事	世四
肥後喰やう指事	世十	上之巻目録終	世四

女諸禮儀上八四

同 仁  
辨 1035  
卷 1-2



女諸禮儀綿卷之上

○女の道と身と心と事

夫女子の陰やて内は海あり陽やて外とらむ  
る天は自然の乃種なり陽をさにして夜は  
やと、爰のつねに女も男も物も心も  
心はたごとく照ゆらうにて万端をさうり  
指の事、海はむらりの行あるらふは地味に保るも  
より聖賢の道あり女も男も心も物も  
心とらう、海はむらりの行あるらふは地味に保るも  
男姑より夫とて一切、貞操とて固抱おれ  
上と教ひ下と懐を揃るまはて業あることと女は道  
とのふし、社者より今中なりて貞女賢女と云れ

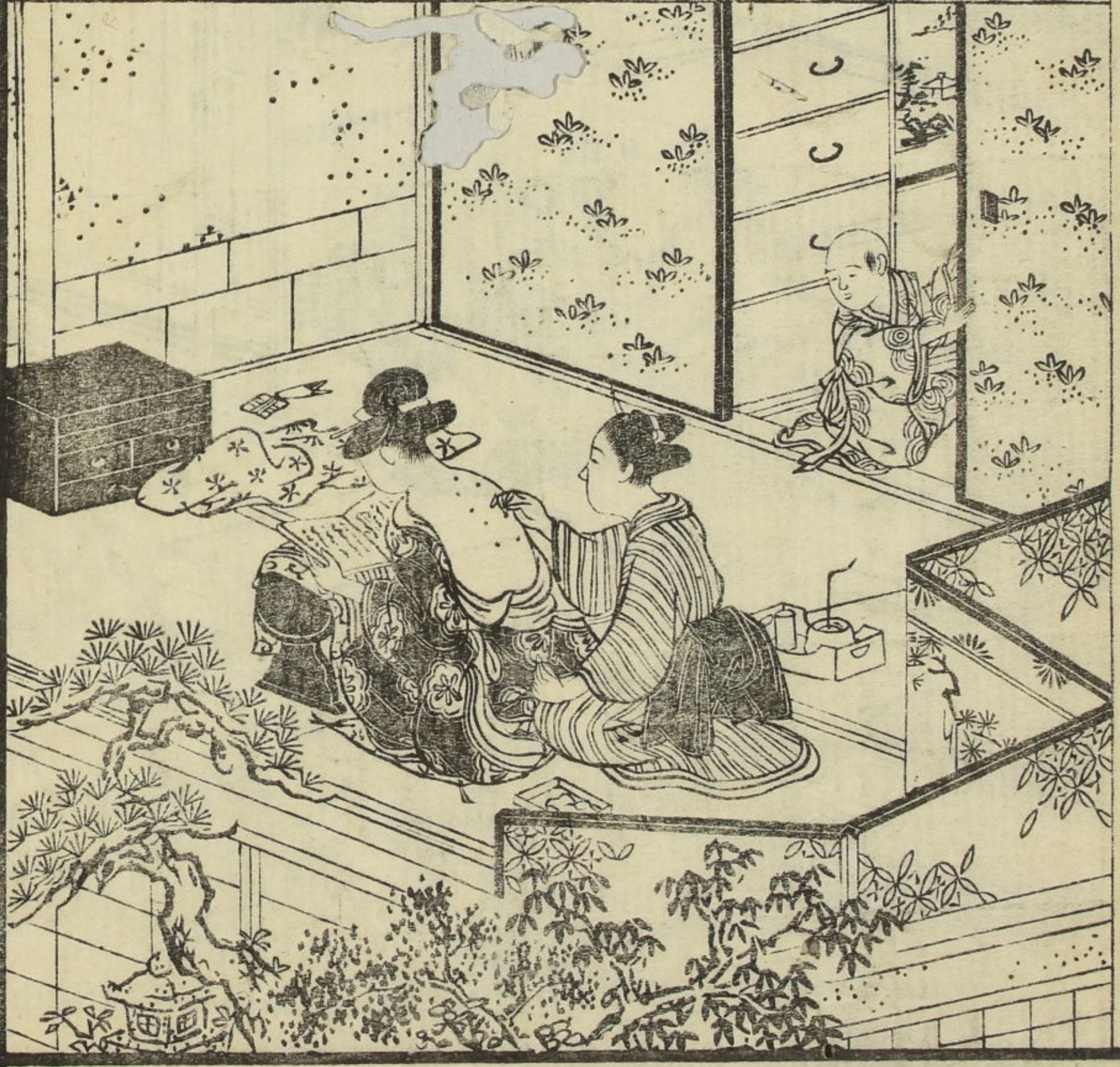




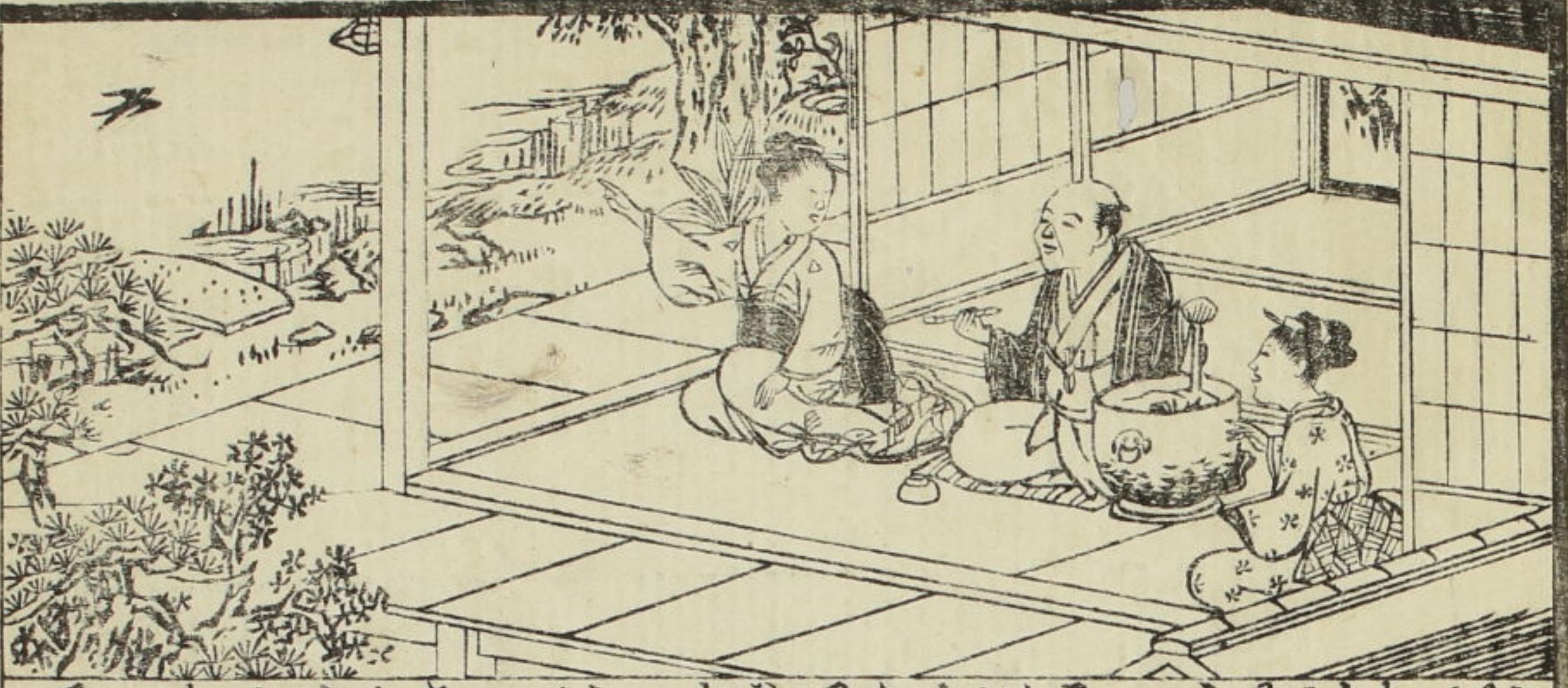




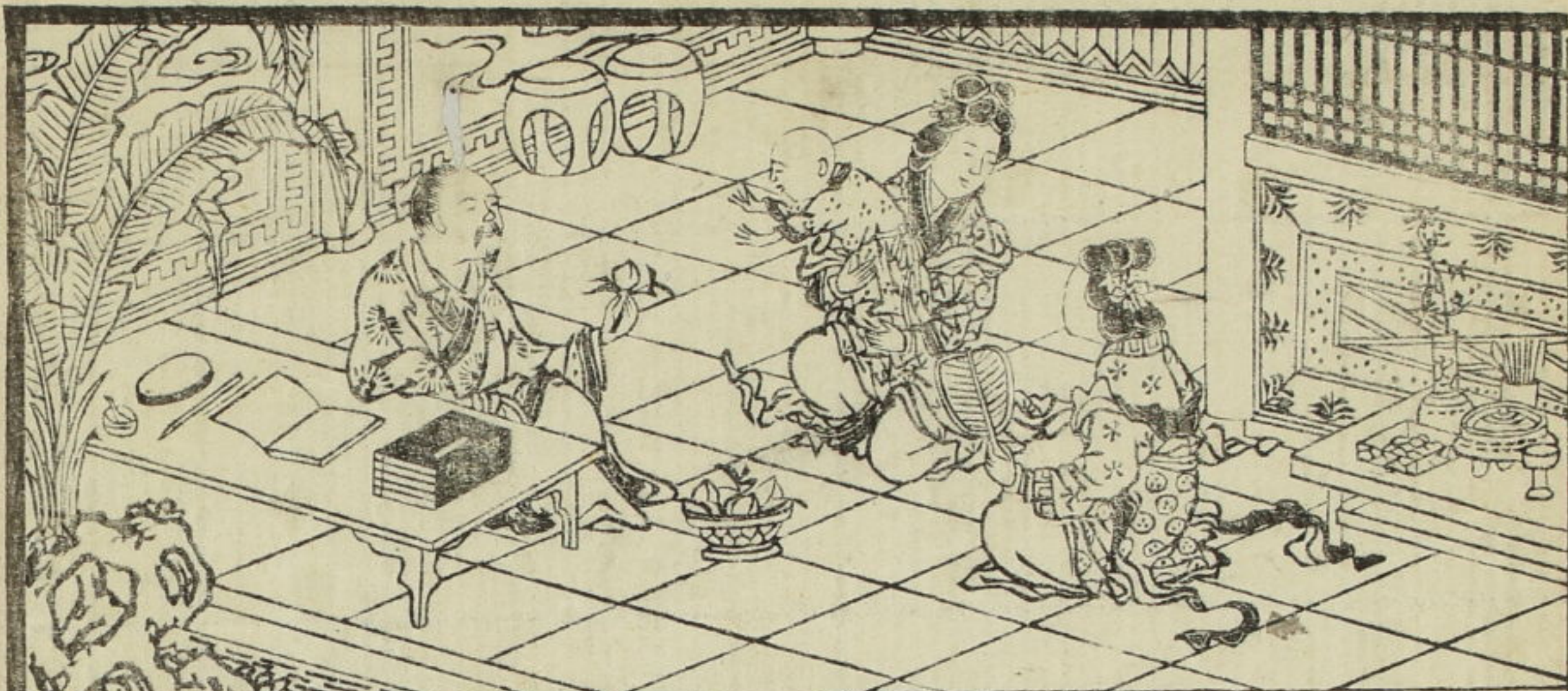
守り女の獄おろしうらぬと  
 一しと一青一人の  
 女ありあつて夫ありれ  
 富くある父母ありれ  
 再びあへんせんといれ  
 出れど又さしけ法  
 やせん女子あるとい  
 天乃とつらと宴とけ  
 中しとる夫と死るせ  
 のあまは是きまりた  
 けられが及ぶ何とて  
 他の夫はまて中ばや  
 今又嫁りあるとい  
 久しく待つしむる



女流上ノ四

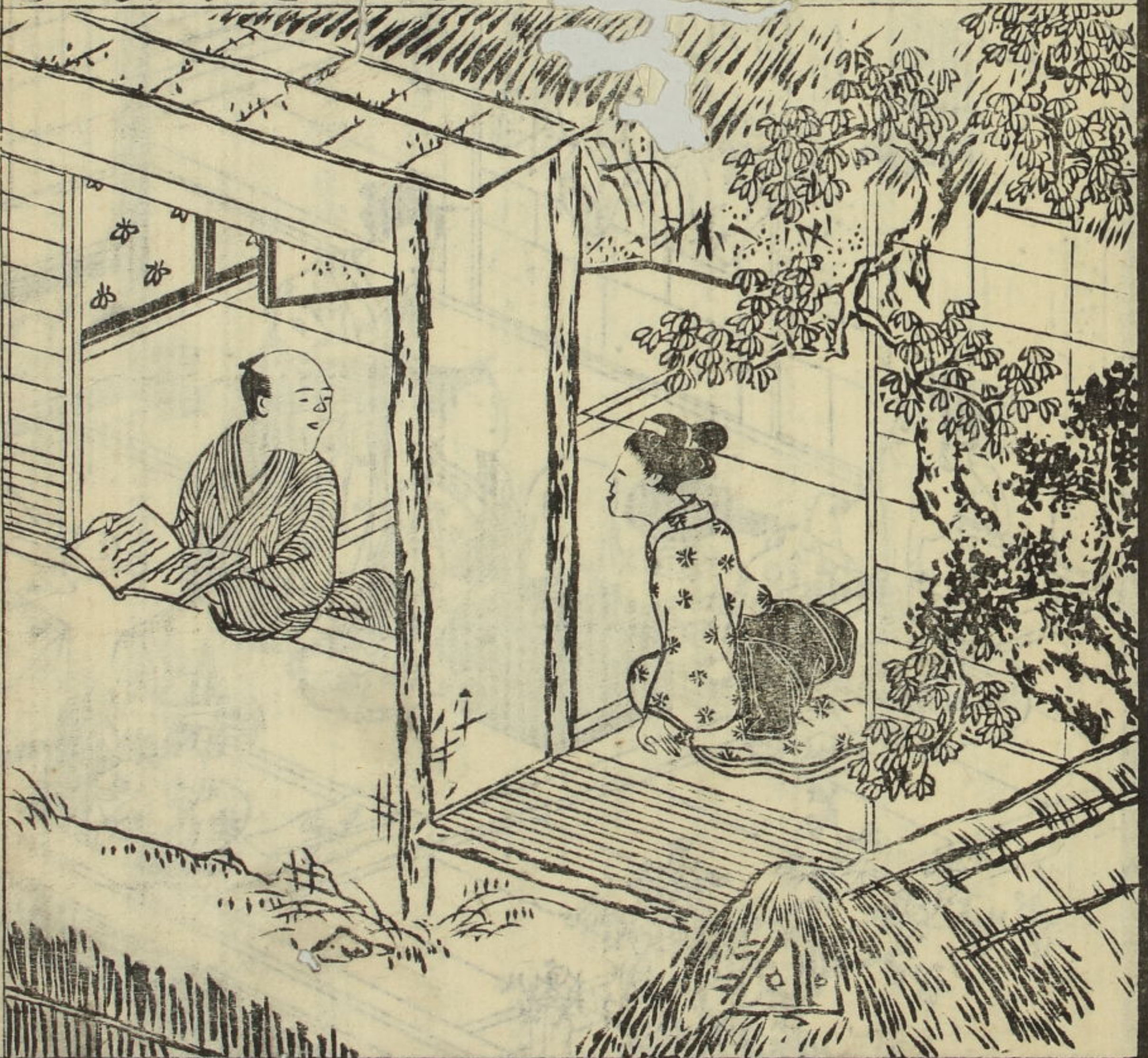


守り女は心直なれ老れざらむ法もあはれども平  
 けは身持と大のやて病れり名は保妻は多くハ  
 病よりて子ありてもの有はり三儀礼の女を  
 ろり是女子れ第一の情を懐べり也法は方り此を  
 け仰一の名をさぐり父母兄弟おれどわら子愛目と  
 一一家と礼と是之三法基補の始きりれおふ者り  
 女はもろけこのあり男ののろくをえろふ百人百人  
 けがともあかさんおきておを喜憂を海をりのこもけか  
 じよよをけり青が粉より所と碎る花を思ひたを  
 守り女とるるるばや親への孝夫への標のあふ命と捨  
 袈裟の帯が貞女と名ひわらべ一人の我々のし  
 小張りのつりと知るべしぬきばおる中流りあるれもの



かりといへば恨中も甚居淨福理流け分と好まら男  
 とを附せし塗樂と愛て息を一人多きを如と好  
 り名を標一身と考の基と知べし情へさるにえ  
 身に格を深なれ去り行り格氣如のわね自う  
 夫と疑い恨とわらるる有あつとめ肉を候也へと  
 りも忘つ物とさるく悲げれ夫の心を味かぬたり  
 心さるの之身と思と病のわらるる疾病の傳  
 へて思病のわらるる子孫に傳家督相續成り  
 故り行りた始り道一十時平病ありて一月とく  
 程も送つて病を成る方去さるる夫の法せん疾  
 病のわらるる我人好くと娘のおわらるる又平生者  
 生わらるる身持取増中清の病致さるる目も  
 女法上ノ五

なる人を言ふお父を  
 ともとなて思ふ長一人  
 うら鬼も角もやうふ  
 一と見れ死すの誰と  
 程とて一生とわらんや  
 下手極いといふも又母  
 まりれいといふも又母  
 さうらつ自おむりのやう  
 母うららうら入おむとひ  
 なる意ありの意れ雄と  
 あり一雄のついでお中と  
 つけておちるべし又来り  
 意はの雄意おてもひ  
 ありておちるも作お中





といふそのまゝねのりといふ  
 るふ海とあつちの長といふ  
 人間として二人のまゝまゝ  
 〇じう〜夜七九の世は潤  
 浦と〜六ありの五十五  
 〇じう〜子かうりもれば  
 書の新主人妻と入ると  
 〇じう〜びと〜しと〜の  
 〇じう〜入り〜しと〜まゝ  
 〇じう〜子か〜しと〜の  
 〇じう〜の〜しと〜の  
 〇じう〜の〜しと〜の



女系上ノ七



一は端〜其まふち〜女の身〜  
 〇女子平〜  
 〇女子平〜

じつまゝくしける暇  
 彼妻いふ乃男も  
 産るるの子威せよ  
 志くして婦神の  
 仕へ者どつとく  
 重の母の倍せり  
 高き人多かり足  
 妻の杜氏ぬのり  
 大田お忍ひ家  
 縁一若心の相  
 あり申すは  
 ○女の身まの細く  
 るると男の相と  
 清雅中へ船のつて



まげり一身のまの  
 心と一風俗  
 所中を始と  
 女のなるれ  
 の伴のわ  
 んりらと  
 とくらば  
 産つる  
 産も  
 とく  
 中  
 産



かつりそ客と能せんものと  
 考ととど一先立宿者の  
 宿が一ゆきとゆき色に足  
 のまも宿うた獲うたに  
 ちと清れたとちち柳の  
 ま風よまひくぐめくじ



いろね花と申 遠まうた髪やの嘆いと付りを  
 ぞ金精の波に舞も自随落るふちと必ひまのたれう  
 るまののぼり冬も魚自らんゆのあを身じこ  
 成のこねむとつかならむおとそ物くわらあろ  
 かり枯風はまあまのの宿一枯風まあまう  
 必落よとのと知一鼻の先のと移り連身清ら  
 るまののぼり身清らるたむせむせむせむ  
 かりのくねむおほくまうたののののの  
 上りま清らとあひまのまの用一これの男女  
 清らまののののののののののののののの  
 の別ち申これの女の一これの女のののの  
 考れもまのののののののののののののの

身もか一のそり一ゆき  
 一人目まのゆきと解  
 そのゆき

○女に一と一軍一の書ハ  
 女に書は書船女大書  
 大和女子能名別女信和  
 信和女子能名別女信和  
 百首かや一ら一ゆき  
 一ゆきのののののののの  
 一ゆきのののののののの  
 一ゆきのののののののの  
 一ゆきのののののののの  
 ○女に一と一軍一の書ハ  
 物語は書わがうぬおね







○女名のいしり人本と刻  
 繩と結びく心の貫へて  
 せーが著胡のへる美人  
 鳥北姓と慕へて女名と  
 作のしりあひまて明か  
 とそとさしあひは彼名法  
 大作遠りのふととらそ  
 ○和歌伊弉諾伊弉冊の  
 神伏りり下照るあ  
 二首の歌をいふとそ未  
 女名に教るをいふりしが  
 素盞鳴尊の御名  
 と英のやれ海にひり  
 邦り女名のねりり二十



むひのなとまうらば風俗  
 わい清人の夢を女名  
 見りて一ふかたの十  
 ぼりりこれとやくまの  
 だーカ業かど女名  
 女名上十九

一女名といふなりそ  
 素盞鳴尊  
 夜句茂多菟伊都  
 毛夜霸餓岐菟磨  
 語味爾夜霸餓枳  
 菟俱廬贈延夜霸  
 餓岐廻  
 ○短冊のま書りり  
 上のおのへ一字わけて書  
 トあさりり下りり七か  
 上て書りり下りり七か  
 りの顔あふ先取をかき  
 又もとそり二の百中書



三のむすく座のむすく  
 六のむすく座のむすく  
 一五のむすく座のむすく  
 一五のむすく座のむすく

一五のむすく座のむすく  
 一五のむすく座のむすく

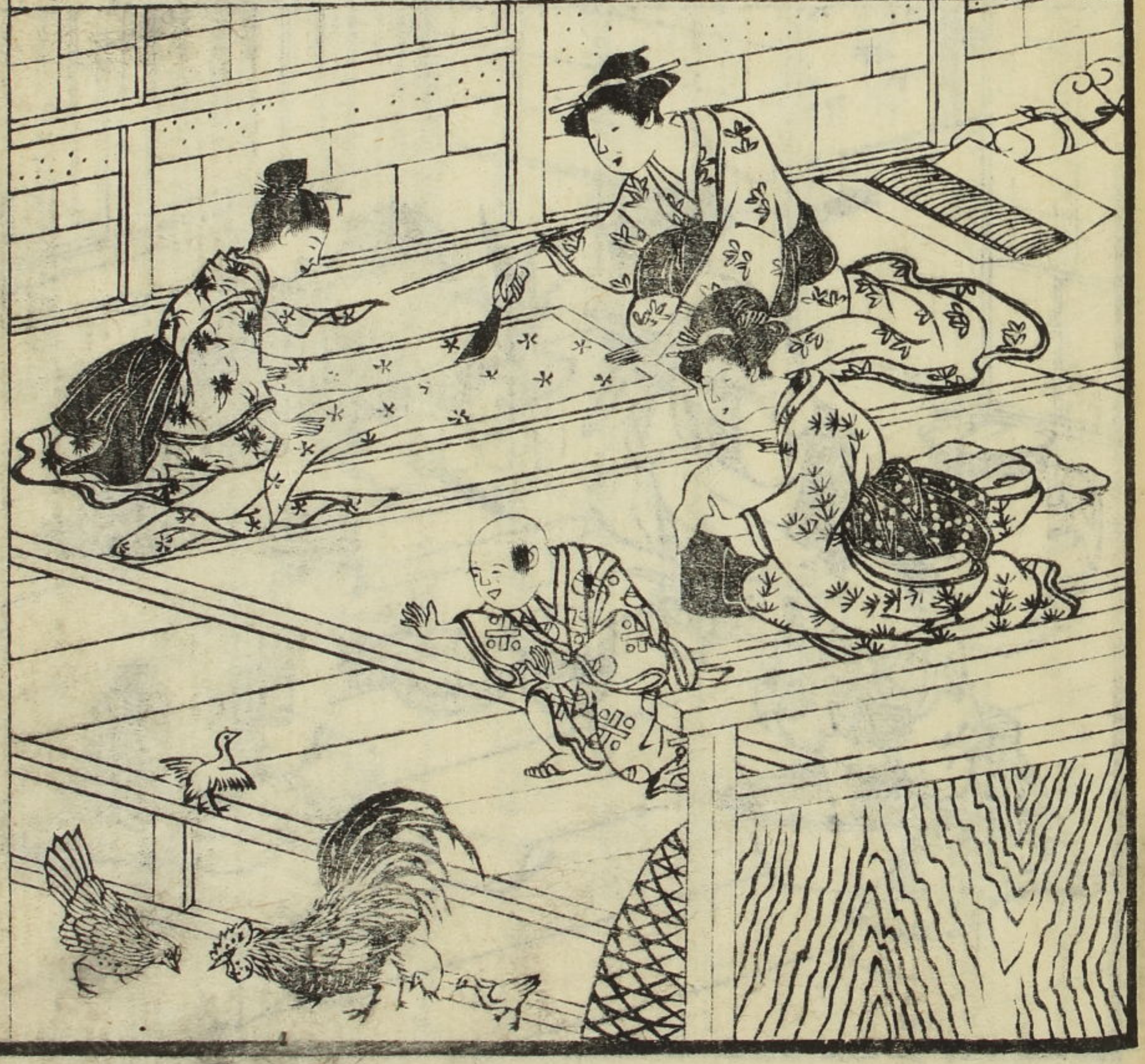
一五のむすく座のむすく  
 一五のむすく座のむすく  
 一五のむすく座のむすく  
 一五のむすく座のむすく

一五のむすく座のむすく  
 一五のむすく座のむすく  
 一五のむすく座のむすく  
 一五のむすく座のむすく

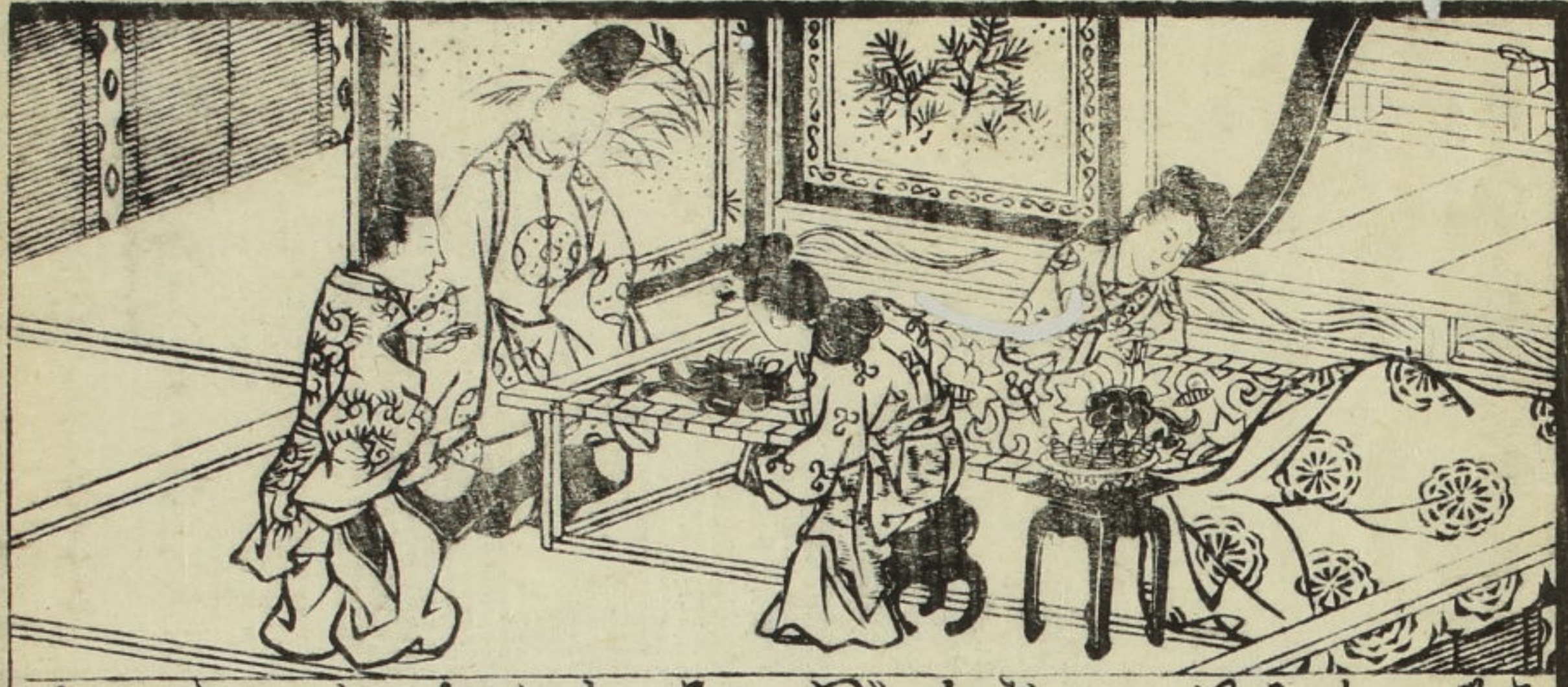
○女子物の半

一五のむすく座のむすく  
 一五のむすく座のむすく  
 一五のむすく座のむすく  
 一五のむすく座のむすく

一五のむすく座のむすく  
 一五のむすく座のむすく  
 一五のむすく座のむすく  
 一五のむすく座のむすく



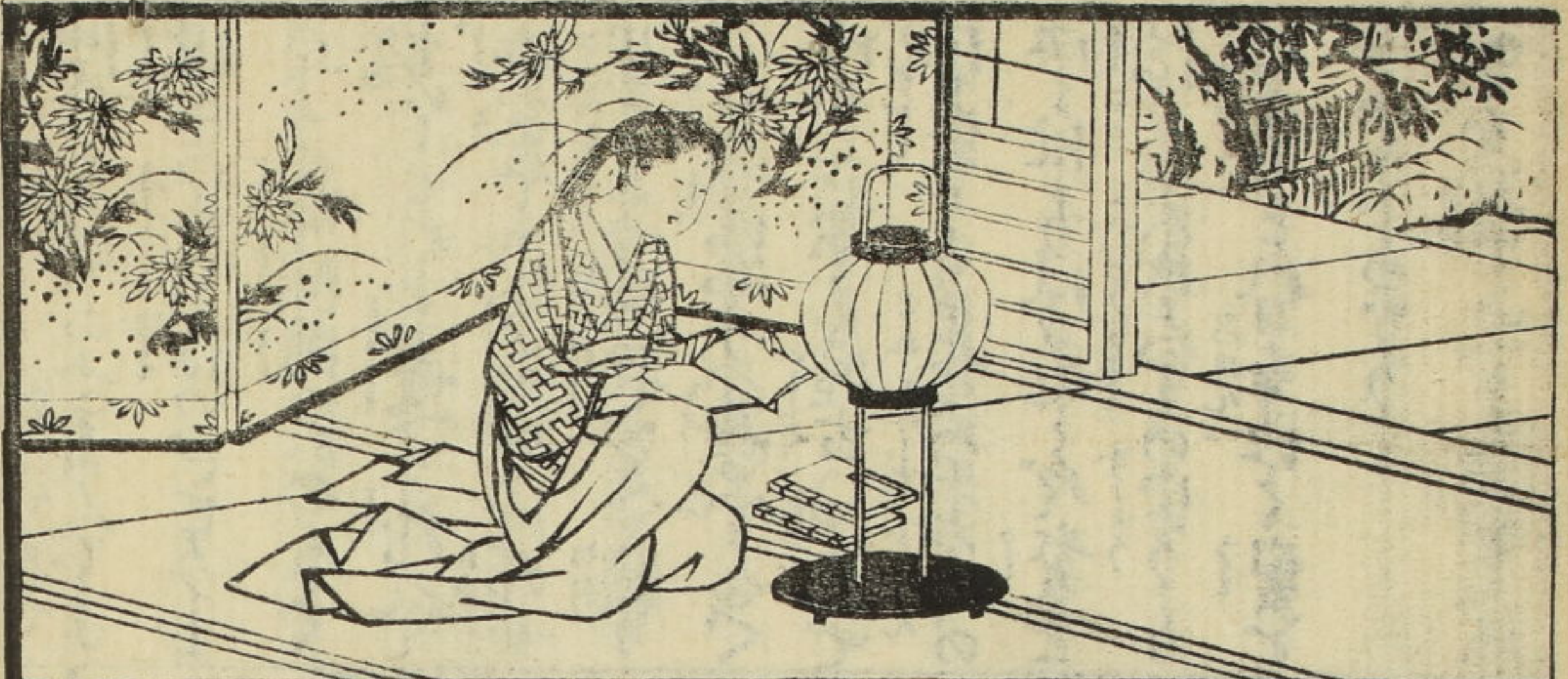
〇衣後神代りも有り  
 ともきく成るる神  
 天皇の御宇百瀬より後  
 二女を主伴らるるの  
 長の間より又見後身ひめ  
 織信織成に人となま  
 け女日守も来つて後  
 〇長年を製作する者



〇書字の事  
 〇書字の事  
 〇書字の事







鐘汁の樹の女家の一大事やう若り樹の女  
 樹の女の時二生の一と上り下りつたて方落るる  
 中へいりて難きもの小袖のはな指に能く金と入  
 はまろと深きおぼしめしをわたりて余り愛せむ  
 とくづらば良人の上におきつて仲と見おひけり  
 又古くはものなほ世におかれ振と平一の  
 是れは種よき用ひるべし一樹の女は其夫の心に  
 隠しむるが  
 ○女は得難い事  
 思ふ女の物にいふ多し中も期々の食ふと酒料  
 理さればけり酒掃ふる事と自ら恥じむる事  
 富家の家やくと下り教多しはの事とも是れ中事と

たがり事ひたるも今片も  
 足とやめして今れは  
 備とつもの結ばし  
 中へ結やう奉を殺し  
 とども其人の心れ  
 夫の職分おぼしめさ  
 経書は清田也いす  
 かつはつららの結や  
 夫の心の中をいり  
 とくづらば一家親類  
 人ある時いりげの  
 田也いすは結ばし  
 髪はまわらば不

知れぬ叶ぬるぞう一其れは男が夫の酒を食  
 かね人するをいりぬる酒の有るは斗りぐに  
 且ば自ら勤め酒とて業を梅又酒ありて所  
 夜心とては帯とぬく後のぬく業を自ら  
 折るはまの事とて今もはれおぼしめす  
 医乃のりつら子中も狂い病ありぬるは  
 心よあらくもんと思つ又成りがたむあ  
 當世に夜服と勝つてとて斗の医師  
 いらるる業とて個わらん中も切の親  
 かれは是れおの心無かまはる一  
 人は相法も一其れ人の中へ  
 ありはるる事







まい見おつべうらどえ来敷い事とて一應と興  
 けまことおとけ又顔首とらむど刺もむたはとのけし  
 てそつて際の見おつる見見んがく拙し生れりて  
 男もまらまのしれなれども又人の意を宣いたいな  
 け刺目おまの指もまど一化粧も又第一一やそ  
 顔おかろの入る洗符の甚ど妙一能ぬいとりと  
 際見へばまどよとたなれども身の中袖まども結なく  
 ぬり際まらまら拭ひるまど一洗際もたらぬ最見ぐ  
 う一近來の面と拭ひ首まら袖まどと洗わり人後  
 足も色の白くもものまらぬも色もまら婦人の切  
 つらう一いふ事と聞かぬらたかおしはてして見らる  
 らるに海りも其旨一は見おつべうらつれお事乃

女はの上ノ世

皇后の御とけ此の御は  
 見たり  
 ○齒と洗らるる日本延来  
 帝の御とけおとけ又男  
 子れ齒と洗らるるの鳥相  
 院の御とけより御来友の  
 まい洗洗染とつけなま  
 せよまらぬとぬとまら  
 水もまらぬ又まらぬ  
 たのこまらぬとまらぬ  
 洗染といふまらり  
 ○化粧のまらに固の文王の  
 とけ女人をとりめて向粉とよ  
 そらまら又泰の始まらり

ひん消のごくおまらるるわくく白ひも除りれ  
 多と賜くまら人射と不徳と忌香の流らる  
 若とまら  
 ○人よ挨拶の事  
 貴人まら女のまらるる二の間二の間すでおびしむる  
 一挨拶のまらとまららうお言葉れ地走第一なり  
 菓子酒者おる上臈かどの殺たまら一とまら  
 二の間二の間まらるるのからあまされたむおらるる  
 挨拶のまらとまらるるの深切とまらとけ又まらあま  
 石は女まらとと叱まららとまら各へのまられらるる  
 男客まら障有べ一其上深切れは於て女客と同  
 扱たまら一とのまら酒者まられ持すまら又親の御



書りね給ふま指箱とし  
 つも紅紙のま日本  
 西の作りもや時代  
 未だ酒あふむど

○松井のの紀原ふん  
 赫骨氏梳とつらとつら  
 梳へらのとととと批ハ  
 今の装結ぐーかり喬  
 り純お伊井冊のまたりの  
 沖替湯津の梳梳は  
 向とられ日本末も神  
 侍り多し入る女  
 婿のひとあ作とめて井と  
 かりて髪とほぬとる



○魚とり指の事  
 魚の指中うい男れどやかくかからとさげ様を  
 とはこたな〜そんたりともたの子乃指  
 されとらうらふ〜つとさおの手にくさる

妻のとは心むく洞と  
 ちつて足とつくりよこに  
 つぬく舞きあふま  
 状溜とびて〜あふん  
 ざーのま〜あ〜女  
 に限るは男子も筆しる  
 又難組よ〜  
 見えり  
 ○上のさぐさハ熊子一り  
 わげてあつ登一ハ熊子  
 魚ひとくおらう下  
 の時地よりとを扱し  
 ○熊子指ともあふん  
 なる〜結ひ改替れの時



あ〜の〜か〜心ゆ〜や〜て女あ〜が〜其〜人〜白ひ  
 て能ま〜あ〜指〜強〜よ〜男あ〜る〜が〜あ〜つらに  
 居た〜ふ〜女あ〜る〜あ〜入〜ひ〜て〜あ〜ら〜る〜指中  
 強〜よ〜魚と〜あ〜も〜先〜た〜りの〜手〜あ〜ら〜つた  
 ておの〜手に〜魚と〜あ〜と〜あ〜へ〜せ〜魚と〜ら〜そと  
 なる〜除〜り〜も〜さ〜も〜正〜に〜魚〜指〜な〜く〜時〜ハ〜魚〜此





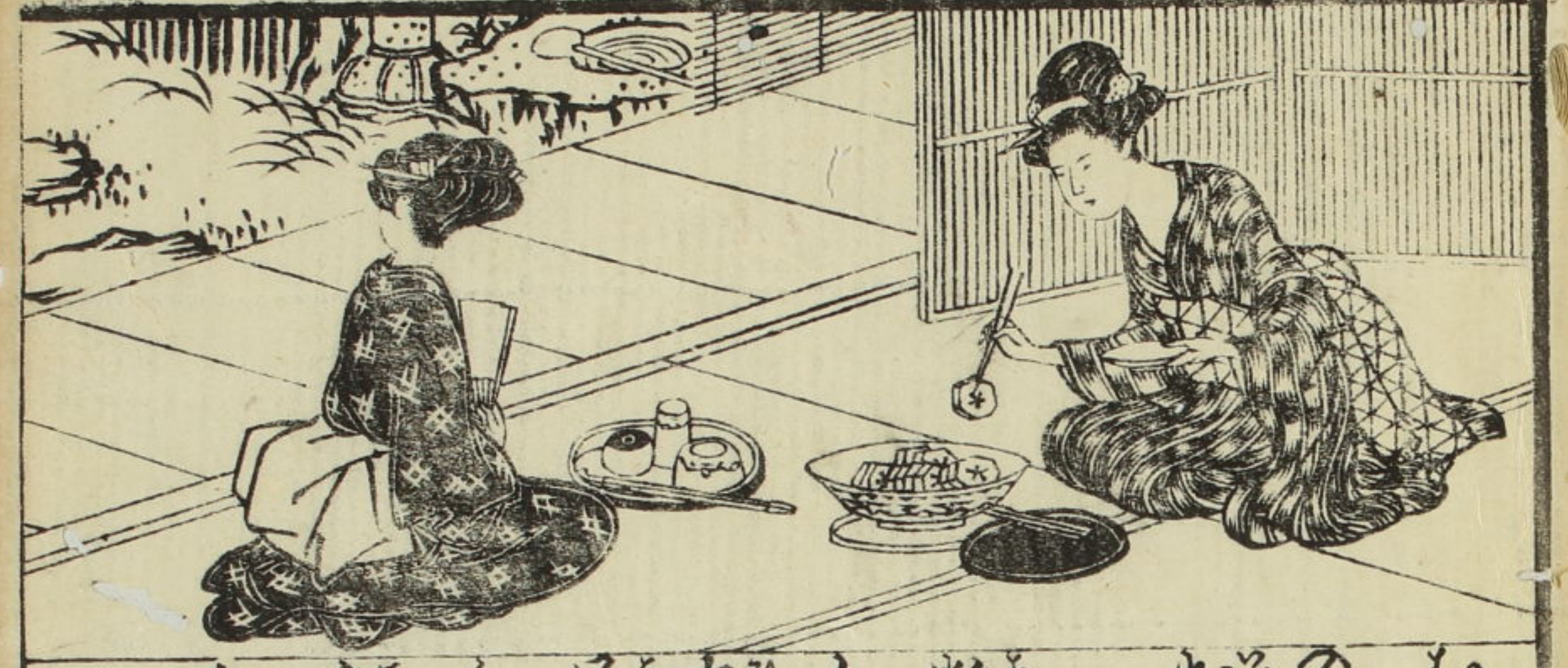


べー二款同ふでたる先  
 実とくひ後けを吸べー  
 二款又まてめおあし  
 ○人は民布とまてあし  
 切目のことおひて二切ま  
 とおさ  
 の丸とまのうとらわの  
 写の書のでくはさ  
 ニつおりて又様まうてま  
 いとまべー個一盛りの  
 だの刻どして丸とぐ切て  
 まいほくまうー女  
 かにまのうとまのうと  
 丸とまのうとまのうと



りもあり  
 ○菓子と出に事  
 本式ハ造りたふ  
 一なるり足の  
 又二方足らちふても  
 かり平生ハ菓子盆

出にの屋の半人の  
 流く盆や〜菓子  
 だどかり  
 ○粽まのうと  
 粽とおんとおのうと  
 外の盆は〜巻目とほ

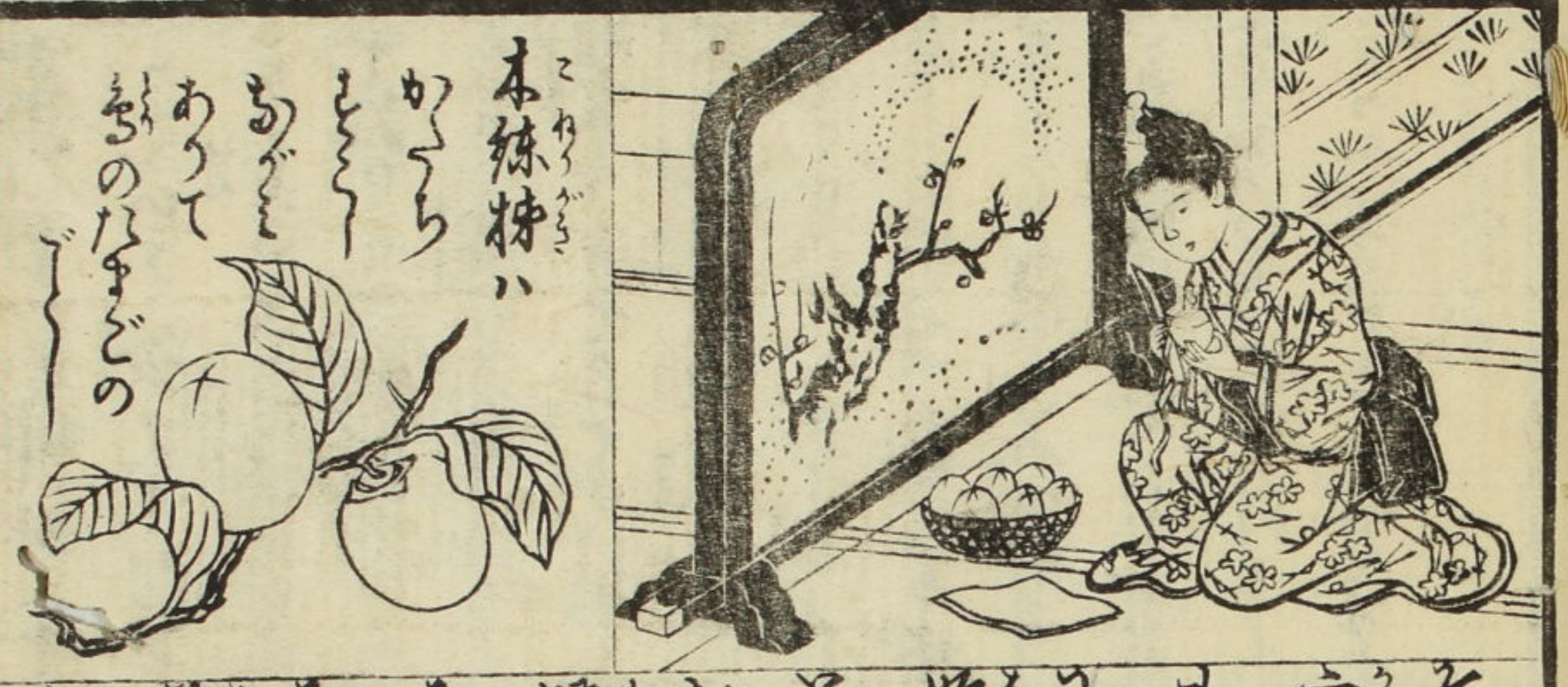


しき中の解をうと二カ  
 のどまのうとらわの  
 おひーこれ真まのうと  
 ○同喰やうの  
 粽の葉のまのうとらわの  
 ろらららららららららら  
 たは粽どららららららら  
 是別古法ららららららら  
 くらららららららららら  
 真らららららららららら  
 わらららららららららら  
 ○膳敷まのうとらわの

〇同くはのちやうのまづ  
 ひねとつしひかきまじり  
 とぎぬじく時たのむぞ  
 とまのいらのちやうむじだ  
 扱ひらさきむじくべーとて  
 小口をちやうとまりてそり  
 とれり入は切くまじり  
 切やうのまじり切くまじり  
 ちーのこーぬ人のちやうむじ  
 そや小口のこれめて実出に  
 ちうけしてまじりぬらんぬらん  
 くれ切くまじりこれい土  
 用中のちやうと中なる水の  
 生さるちうのちやうとちう



〇同喰やうの事  
 揚枝やうの事  
 切り入まじりちやうとまじり  
 ちやうとまじりちやうとまじり  
 まり中とまじりのちやうとまじり  
 ちやうとまじりちやうとまじり  
 まり中とまじりのちやうとまじり  
 ちやうとまじりちやうとまじり  
 〇同喰やうの事  
 揚枝やうの事



それを持ちて隠れと右のみにけりちやうとまじり  
 方とまじりちやうとまじりちやうとまじり  
 まり中とまじりのちやうとまじり  
 ちやうとまじりちやうとまじり  
 〇同喰やうの事  
 揚枝やうの事

本株持ハ  
 ちやうとまじり  
 ちやうとまじり  
 ちやうとまじり  
 ちやうとまじり



女中入りたる時、いづれ  
 とちかきく切てあつたど  
 ころ蓋子のせ揚げをりて  
 中のぐらゝ一両丸おめても  
 ちかきく切てあつたど  
 時直ちりてきてやひし  
 又出用とていひ、又また  
 ぐらゝ切つても切てあつた  
 だ、土用とて、中なる水  
 直ちりてあつたど、あつた  
 ○利子のばあやうのうら  
 方、うらむとて、杖と、あつた  
 直ちりてあつたど、あつた  
 つけあつたど、あつた



まつた直ちりてあつた  
 ら、なるたの、あつた  
 うらむとて、あつた  
 ちかきく切てあつた  
 又、あつた  
 肝、あつた  
 ちかきく切てあつた  
 中、あつた

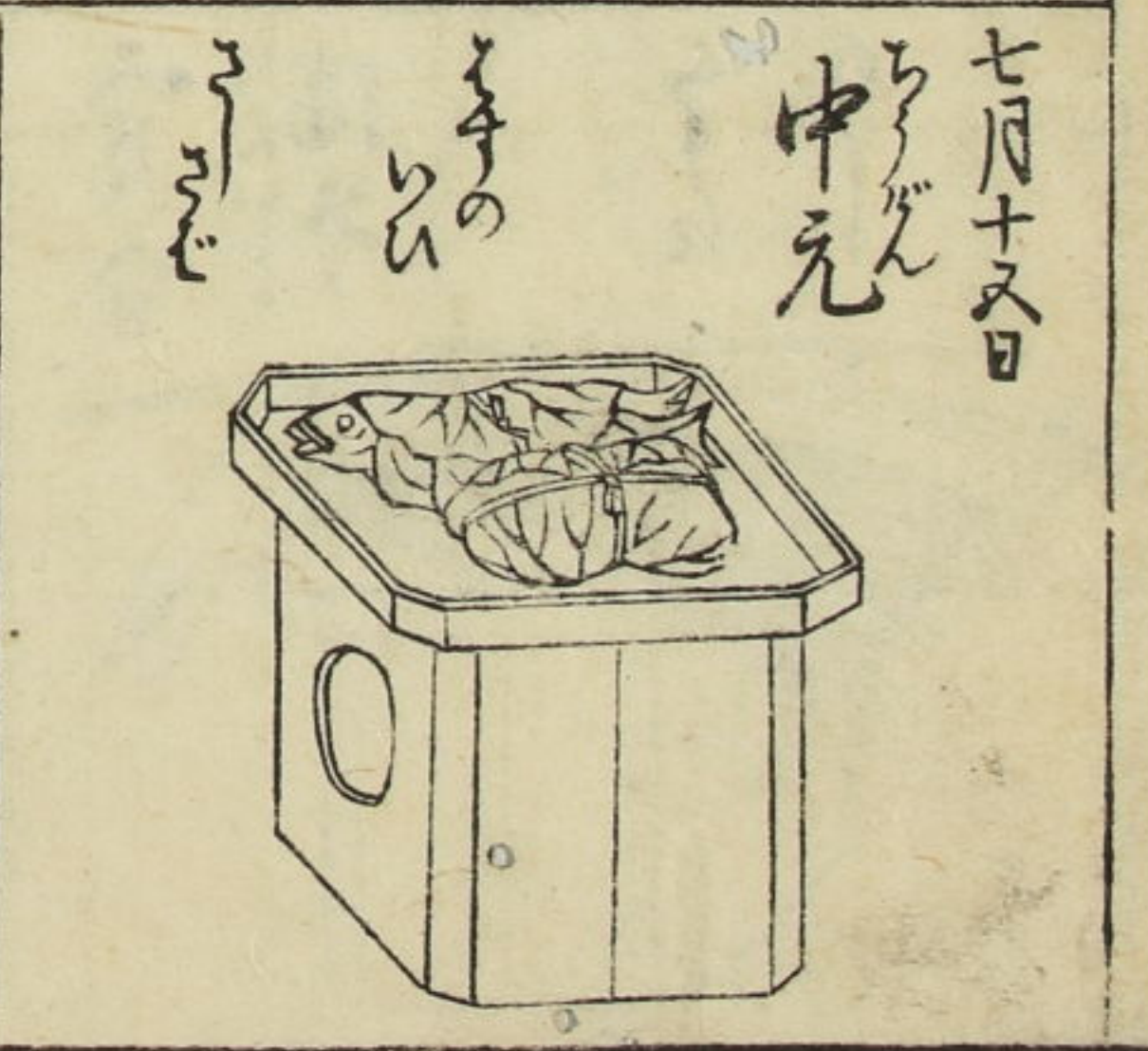
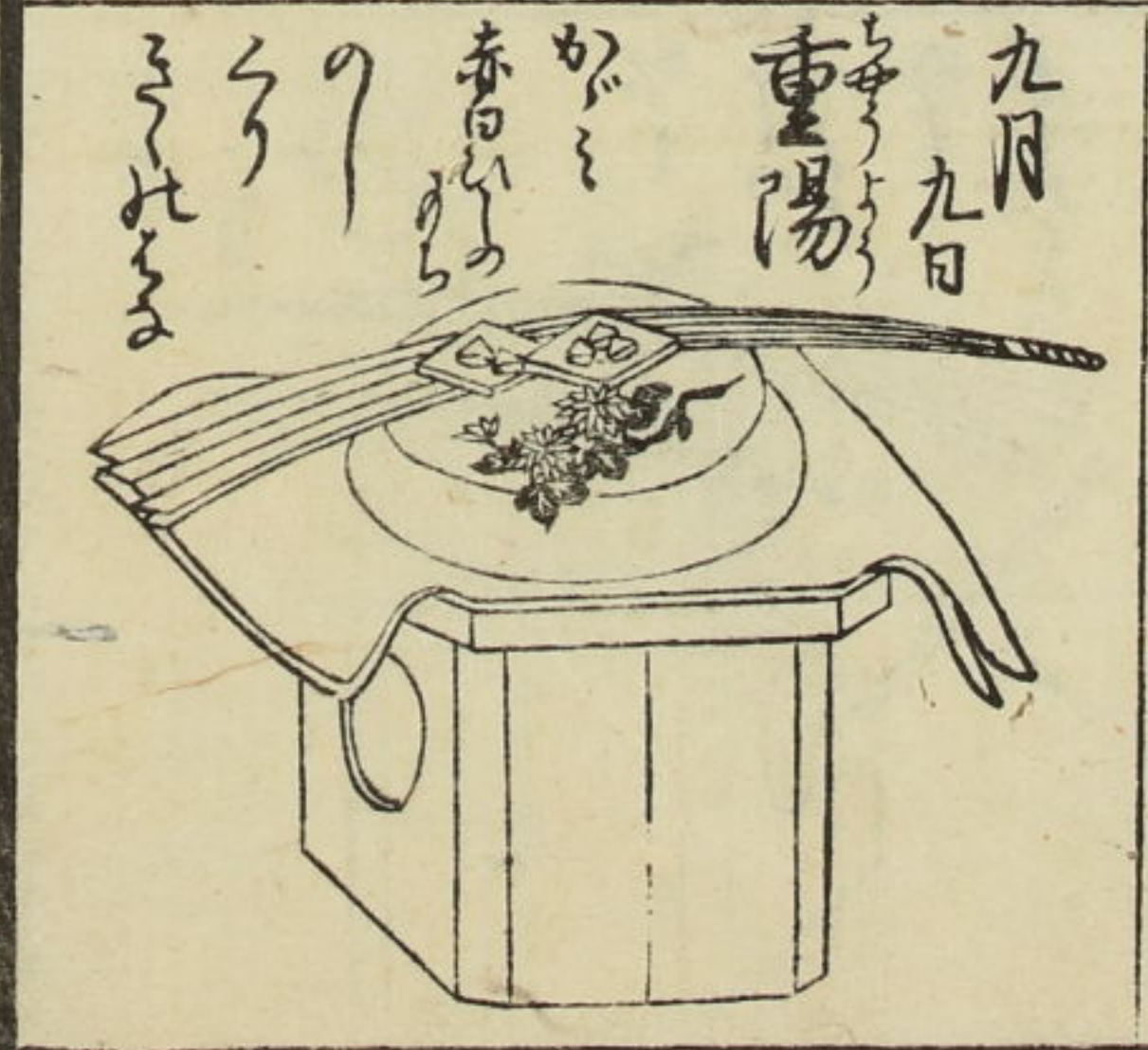
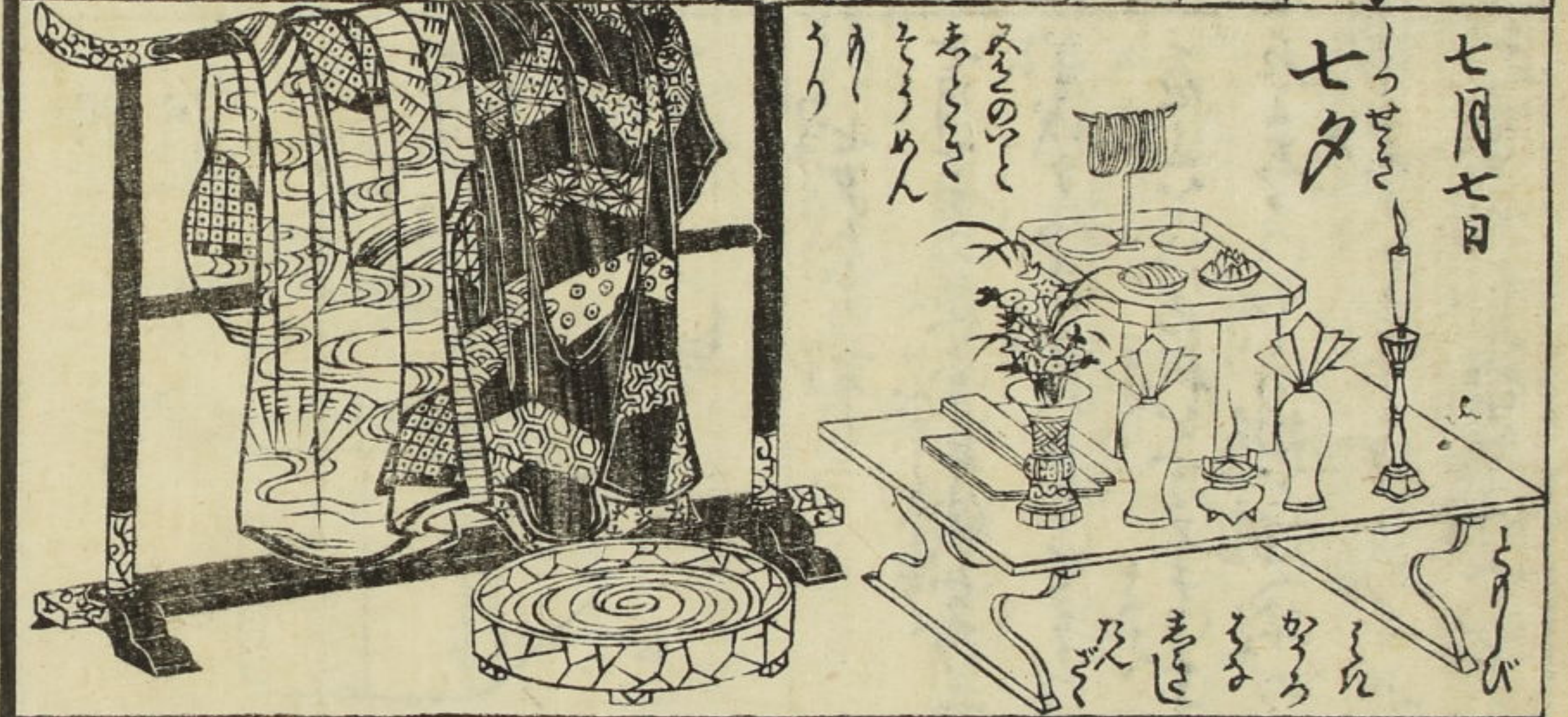
○本條、梅はの、あつた  
 あつた、あつた  
 の、あつた  
 方、あつた  
 つけあつた



著、あつた  
 ○緬、あつた  
 顔、あつた  
 ちかきく切てあつた  
 又、あつた  
 肝、あつた  
 ちかきく切てあつた  
 中、あつた



くべきなり  
 〇くべき青草子かひんまのさ  
 らんぼやんばいけうま  
 まいぬのまこたんまい  
 一はふまのれんげしれ  
 若のまこものままあ  
 そふり結そのまほほ  
 おまぐーのあうのんづこひ  
 足のふらふらびり  
 くひふららと付べー  
 其席のとりま甲のい  
 ろのりゆいおまご  
 片も不真よりぬ  
 茶好茶末にんとぬ



女信上ノ四十一

